

# 小学生の登校拒否に関する事例研究

## — 描画・遊び・箱庭作品にあらわれるところの変容過程 —

北 進 司

小学生の登校拒否をあつかう時、描画・遊び・箱庭作品の中に子供達のところの世界を見ることができ、継続的に振り返ってみると、これらの活動や自己表現を通して子供自らがところの傷を癒し成長していく過程があることが分かる。

本研究は小学校低学年男児の母子分離不安を伴う登校拒否事例を紹介し、遊び・描画・箱庭作品の解釈を通してところの変容過程を考察する。

### I はじめに

登校拒否については多くの書物、ラジオやテレビの教育番組などを通じてその原因や対応について多くの知識を得ることができる。そして、登校拒否の子供に抱える家族や教師との面接を通して登校拒否の背景にある原因らしきものを見いだすこともできる。しかし、いくら概念的にそのことが理解できたところで実際に登校拒否の子供を目の前にし、どのようにその子供に合った援助を展開すれば良いのかを考える時、戸惑いを感じる事が多い。それは登校拒否の子供のところの内面でなにが起きているのかが把握できないため、その子供をどう理解しどこから援助を展開して行けば良いのかが分からないからである。それはまた、登校拒否の子供が自分自身のところの問題をどう理解し、どのように相手に伝えれば良いのかが分からないためでもある。このように登校拒否の子供達のところの内面を理解することはたやすいことではない。

しかし、子供達は日常生活の中での遊びや描画などの自己表現を通して言葉によるよりもむしろ豊かにところの内面を伝えている。特に小学生の登校拒否を扱う時、遊び、描画、箱庭作品の中に子供のところの世界を見ることができ、そして、登校拒否からの立ち直りの過程を継続的に振り返ってみるとこれらの活動や自己表現を通して自然にところの傷が癒え、成長に向かっていおことが分かる。登校拒否の子供を援助して行くに当たっては、このような活動が自由に行える場を保証し、子供の自己表現の背景にある意味を理解しながら子供の立ち直りを見守ることが大切であると考えられる。

本研究は母子分離不安を訴えて登校拒否に陥った小学校1年生男子の約1年間にわたる教育相談過程を振り返ったものである。経過の各時期に見られた自己表現としての描画・遊び・箱庭作品の解釈を通して、母子分離不安の原因と立ち直りまでのところの変容について考察する。

## Ⅱ 事例の概要

1 対象児童 Y男 小学校1年生 男子

2 主 訴 登校拒否

### 3 生育歴および家族

父親(会社員)，母親(主婦)，本人，妹(2才)，祖母の5人家族。両親は結婚当初2人だけの生活をしていたが，祖父の死亡で祖母と同居することになった。1年後に，Y男が誕生した。出産は安産で母子ともに健康，両親の実家にとって初孫ということで，どこにいてもかわいがられた。2才から3才までの間は父親が単身赴任で家をあけていた。この時期，近所に同年代の子供がいないので祖母や母親と遊ぶことが多かった。4才から5才までの2年間は幼稚園に通った。入園時には通園を渋って泣いたが，その後元気に通うことができた。また，入園間もない6月に妹が生まれたが，わがままな子から聞き分けの良い子に変身した。時々，腹痛を訴え病院に通うことはあったが，家族を困らせるようなことはなく順調に育っているように見えた。

### 4 本人の性格等

- (1) 身体状況：左利き，まばたきと指しゃぶりが保健室登校をはじめてから出るようになった。
- (2) 性格特徴：あきっぽい，聞き分けがいい，几帳面，依存的
- (3) 心配だったこと：自分の描いた絵や工作を壊されたりするととても怒る，またそのことにいつもでもこだわる。
- (4) 嫌いな学科：体育
- (5) 好きなこと：工作，粘土，絵

### 5 問題の概要

小学校入学当初Y男は元気に登校していた。朝は町内の4年生の女子に連れられ登校，放課後は友達と一緒に下校する。下校途中友達と別れる場所まで迎えに来て欲しいというので母親は迎えに出るようにした。たまに母親の迎えが遅れても「ただいまー。一人で帰れたよー」と近所に聞こえるくらい大きな声で元気よく帰って来た。順調な小学校生活のスタートに家族は喜んでいた。しかし，5月の連休明けの頃から登校を渋り始めるようになった。教室で消しゴムをちぎられる，走るのが遅いのを「お前みたいなろまは邪魔だ」と言われるなど，友達からのいじわるが厭で登校したくないと訴えた。初めのうちは慰めたり励ましたりすれば登校できたが，やがて4年生が迎えに来ると逃げたり隠れたりする，そして「行き

たくない」と泣きわめき、登校させようとする母親にしがみつくようになった。このような朝の登校渋りが繰り返されたが、母親が手を引いて学校まで送ってやれば登校できる状態で、1学期は殆ど休まず登校できた。

夏休みに入って1学期の終業式にももらった夏休みの生活表をみて「ここまで行ったら学校に行かなければならないんだね」と深刻な表情になる。終日人目を避け家に閉じこもり一步も外に出ない。人相が変わり悲壮感が漂う。「どうしたら死ねるの。死なないうちは学校に行かなければならないでしょ」と訴えるなどただ事ではない様子に家族は慌てた。両親は登校拒否の本を何冊も買い込み読んで対応を話し合った。当分の間登校刺激を控えることにし「元気になるまでしばらく学校なんか行かなくていい」と本人に言い渡した。しかし、2学期に入っても「パパ僕を殺して」とたびたび訴えるなど好転を見せなかった。父親は仕事を休んで本人を支える覚悟を決め、「心から血が出ている病気なんだから、自分が好きなようにしていいんだ」と本人に話し、肩車など身体を使った遊びを心がけた。「パパ甘えていいの」と父親と遊ぶようになり徐々に元気を取り戻していった。そして、夕方になると母親と学校の見える場所まで散歩に出られるようになり、やがて母親と一緒にあれば保健室登校ができるようになった。しかし、片時も母親から離れられない、猫のぬいぐるみを常に持ち歩く、指しゃぶりやチック症状（まばたきや「へっ」「はっ」などの音声を発する）が見られるなどとても通常の学校生活が可能な状態ではなかった。学校と家庭で話し合ったが、このままでは改善の見通しがつかないと判断し、学校の紹介で当教育センターに親子で通所することになった。

## Ⅲ 経 過

約1年間計30回にわたる教育相談を実施したが、毎回両親と本人が来所した。初回から終結までの経過を新たな展開や節目と思われる時期によって3期に分けて記述する。実際の教育相談では家庭や学校の対応も行われたが、秘密保持の必要性や本人の状態像を理解してもらうことのみをねらいとしたので、家族状況などについては一切省略した。

### 第1期：母子分離不安を克服する時期

生育歴やこれまでの経過から母子分離不安の軽減を図ることが重要に思われた。そこで、母親には受容的な態度で本人に接するように促し、本人の状態を見極めながら適切な助言を心がけた。約6カ月にわたったこの時期を母子関係の変化によって4つの段階に分けて概観する。

#### (1) しがみつきの段階（1年生12月）

ア 母子関係：一日中母親にしがみついたり、擦り寄ったりして片時も母親のそばを離れない。おんぶやだっこをせがむ。指しゃぶり、顔面チック、猫のぬいぐるみを持ち歩くなど、幼稚園入園以前の段階への退行状態であり、「幼稚園に行く前、一日中ママと一緒にいられた頃がよかった」と母親に甘えた。また、登校していないことに対し母親が登校刺激を出していないのに「僕学校に行か

ないよ。僕なんかどうなってもいいんだ。僕は2年生になっても学校に行かない。僕は学校に行かなくても車のことおぼえたよ」などと登校に対し予防線を張る。

イ 同胞葛藤：妹がおもちゃを壊しそうになると「やめろやめろ」と言うがおろおろしながら手だしできずに「Mちゃんなんか死んじまえ」と小さい声でつぶやいたりする。

ウ 遊び：母親との一体感を求めるようなものが見られた。

①「ぐるぐる回り」：母親にかかえてもらいぐるぐる回るのを喜ぶ。母子一体感を味わっているのではないと思われる。

②「かくれんぼ」：母親と妹の3人でかくれんぼをする。母親を見付けると声を出して喜ぶ。目の前から母親がいなくなる不安と消えた母親を再発見する喜び、つまり幼児期での「いないいないばー」遊びに相当するものと思われる。母親をところの中への内在化する作業のようである。

③「お化けごっこ」：自分が毛布を被り「お化けだぞー」と妹をおどかす。母からの愛情を奪った妹に対する遊びを通しての攻撃かもしれない。

④「E T人形遊び」：自分は嫌いなE T人形一個に向かい合う形で、自分の好きな人形を複数並べ「大人でも子供でも入れる学校」といって遊ぶ。E Tは担任の先生らしい、また好きな人形の中の「大人」は母親のようだ。母親と一緒に学校に行けると訴えているように思える。

#### エ 描画

「山路」「坂道」「トンネル」など克服しなければならないものや「壊れた車の修理」「川の中のゴミ掃除」など駄目になったものをテーマにした描画が多い。ここらの内面は困難や悩みがたくさんあるようだ。

#### (2) 母親さがしの段階(1～2月)

しがみつきの、擦り寄りが減少し、チック症状は消失した。代わって次のような行動が見られた。

#### ア 母子関係

①「お母さんこっち向いて」：母親が本人から目を離すと極度に怒る。例えば、母親が見たいテレビ番組に見入ったりすると怒ってスイッチを切ってしまったり、来客と話をしていると邪魔をしようとする。

②「地球はどこから生まれたの」：頭に浮かぶ疑問を「なぜ?」「どうして?」と尋ねる。母親が常識的、知的に答えても納得しないで次々に「どうして?」と追い詰められ、母親は参ってしまう。特に、執拗に聞いたがるのは地球や人間の誕生についての疑問で次のような具合である。

「 」内本人、( )内は母親の発言

「地球はどうしてできたの?」(太陽が爆発してできたんだよ)「月は?」(やっぱり、太陽からよ)「じゃー。太陽はどうしてできたの?」(宇宙のガスが集まってできたんだよ)「じゃー。宇宙はどうしてできたんだよ?」と追いつめられ母親は答えられず困ってしまう。「僕はどこから生まれたの」(ママのおなかの中から)「ママはどこから生まれたの?」(おばあちゃんのおなかから)「おばあちゃんはどこから」(ひーおばあちゃんから)と繰り返され「じゃー。人間はどこから生まれたの」(地球で生まれた)「地球はどこから」(太陽から)というふうに始めに戻ってしまう。



- ③「逆さだっこ」：「本当に僕はママのおなかの中にいたの？」と母親に聞き「おなかの中にいた時のようにだっこしてよ」と逆さになってだっこをされる。
- ④誕生のころのアルバムを見たがる：「お前は栗の木の下から生まれた子だ。だから栗のようにイガイガがあって本当は強い子なんだ」と父が励ましのつもりで話すと、アルバムを出して誕生のころの写真をしきりに見た。以後しばらくアルバムを見たがるようになった。
- ⑤おもちゃをねだる：これまでは、「あるといいのにな」という言い方であったのが「買って」と露骨に要求し、次々にねだられ両親は困り果てる。

#### イ 過去の心的外傷体験の告白

- ①いじめられ体験の告白：小学校や幼稚園で友達にいじめられたことを想起し断片的に次のように母親に話す。

「Sちゃんに川に落とされそうになったことがあるんだ」「Sちゃんがここで、あの石から飛び下りろというので困っていたら2年生が助けてくれた」「運動会の練習をさせられるのがとってもいやだったんだ。走るのが遅いのをのろまなんていわれて」「体育は嫌いだ」「幼稚園のころ車のことよく知っていたけど、いじめるから教えてやらなかったんだ。ママに教えてあげる」

- ②母子分離の辛さ：幼稚園時代に腹痛で病院に行った後の通園や宿泊行事での母親との分離体験の辛さを母親に次のように話す。

「幼稚園の頃おなか痛かったんだ」「なぜ僕にいわないで帰ってしまったの」「お泊まり会がとってもいやだった。ママがどうしているかとても心配だった」

#### ウ 遊び

「電話ごっこ」：母親と2人でおもちゃの電話を使って次のような会話が行われた。

##### ①ゴミ処理

本人：地球全体で困ったことが起こった。ゴミがあふれて車も通れなくなった。僕は分かるから電話してくれ。

母：もしもし大変です。どうしたらいいでしょうか。

本人：それでは、ゴミを全部まとめてロケットへ乗せて飛ばせばいい。宇宙は無重力の世界だから、そうすれば大丈夫だよ。僕も困ったことがあったらママに電話するから。

##### ②おやつ

母：地球上の子供達がお野菜を食べないで、お菓子ばかり食べるので困っています。

本人：それはお野菜をお菓子と思い込んでいるんですよ。そのうちお野菜を食べるようになりますよ。

##### ③学校

本人：子供達が日曜日以外は外へ出なくなりました。

母：天気の良いときや病気でなければ出れば良いのに。

本人：また、困ったことがあったら電話してくれ。

##### ④おもちゃ

母：子供がおもちゃをねだって困るそうですが。

本人：おもちゃがたくさんあって、それで遊ぶと頭の中がゴチャゴチャしているのが、わかるようになってくるんですよ。だから、おもちゃはたくさん買ってやった方がいいんですよ。

母：大人はお金が無くなって、こまるんですが。

本人：電車に乗せてやればいいんですよ。電車の窓を開けて冷たい外の新鮮な空気を吸うと頭がスッキリするので、そうしてあげればいいんですよ。

母：電車に乗せてあげれば、おもちゃは買わなくていいんですか。

本人：でも、おもちゃは買ってあげたほうがいいんです。

本人：この電話は、地球全体で困ったことがなければだめですよ。

### (3) 母親を確認できた段階(3月)

「地球は太陽から生まれたんだ」と独り言のようなつぶやきをした日から、母親のまわりで元気に遊ぶようになった。この段階では次のような行動が見られた。

#### ア 母子関係

①「僕のママが一番お母さんらしいんだ」：友達には全く会いたがらなかったのに、母親がいれば短時間なら一緒に遊べるようになった。しかし、母親の注意が友達にむくとすぐに自分に注意を引きたがる行動が目立った。気にいらぬことをすると「勝手にやるな、帰れ」などと友達を叱ったり、「Kちゃんのお母さんなんてブスだ。ぼくのママが一番お母さんらしいんだ」と息まいたりした。

②「お母さんはどう思う?」：自分の判断を求められる状況になると母親の判断や考え方を聞き、母親の判断で行動する事が多くなった。例えば、保健室登校、学校行事(6年生を送る会)への参加などについて「自分のしたいようにすればいい」と判断を任せられると、「ママが行った方がいいと思うなら行く。行かない方がいいと思うなら行かない」というように意志決定を母親に委ね、母親が「行ってみようか」と言うのと抵抗なくついて行くし、母親がいれば学校でも割合自由に振る舞う。

③「僕は誰のまねをすればいいの?」：生き方のモデルを求めていると思える次のような訴えを母親にしている。

「まねをするのは良くないことなんだよね。ママ」(Mちゃんはお兄ちゃんが好きだからまねをしてるでしょ。ちっとも悪くなんかないよ)「小さい子はお兄ちゃんのまねをすればいいけど、僕は誰のまねをすればいいの」「僕みたいにポヨンとしたお兄ちゃんはいない」

④おもちゃをねだらなくなる：電話ごっこ④の遊びの後、気がすんだようで、両親を困らせるようなおねだりが少なくなった。

イ 同胞葛藤：「Mちゃんなんかいいなればよかった」と母親の愛情を奪った妹に対する疎ましさを語る。

#### ウ 過去の心的外傷体験の告白

①妹出産時の母親喪失体験：「Mちゃんが産まれる時、ママどこを探してもいなかったよね」と泣きながら訴えた。これは、妹の出産時、急に陣痛がきてしまい母親は本人が眠っていたため知らせないで入院したが、目を覚ましたY男は母を捜し回った。しかし、家中どこを探しても母親の姿がなかったという母親喪失体験の辛さを訴えたものである。

②母子分離の辛さと母親喪失に対する恐れ：「雪道でママに会えなくなったらどうしようかと心配だった」「僕がどんなにつらかったか分かるママ。ママは引っ張っていったよね」と母親に訴える。

このように幼稚園時代の辛い母子分離体験を訴えた後、「僕の投げたボールが友達に当たっておかしくてみんなで笑った」「〇先生と遊んだときとっても楽しかった」などと楽しかった思い出も語られるようになっていった。

## エ 遊び

母親に手伝ってもらいながら登校をイメージしての次のような遊びをしている。

### ①「蒸気機関車ごっこ」：

本人：「ぼくが蒸気機関車でお母さんが駅長さん。お母さんは動かなくていい。駅長さんの言うとおりにやるから言ってよ」「行っても良いですか」

母：「いいですよ。どうぞ」

本人：「〇〇ステーションに行ったら、そこは蒸気機関車なんか行くところじゃないのに、いくもんだから、その町の人がみんな喜んだんです。」

（遊びがしばらく続いた後）

母：「蒸気機関車をディーゼルに変えました」

本人：「僕ランドセルかついでないよ」

母：「あしたはそうしようね」

②「ゴール遊び」：風呂のタイルの目地に沿って目的地をめざして、遠回りや近道をしてゴールする遊びを母親とする。母親の力を借りて登校する方法を模索しているかのようである。また、母親の意志を確認し、それに応じた行動をしようとしているとも思える。

## (4) 母子分離ができるようになった段階（2年生4～5月）

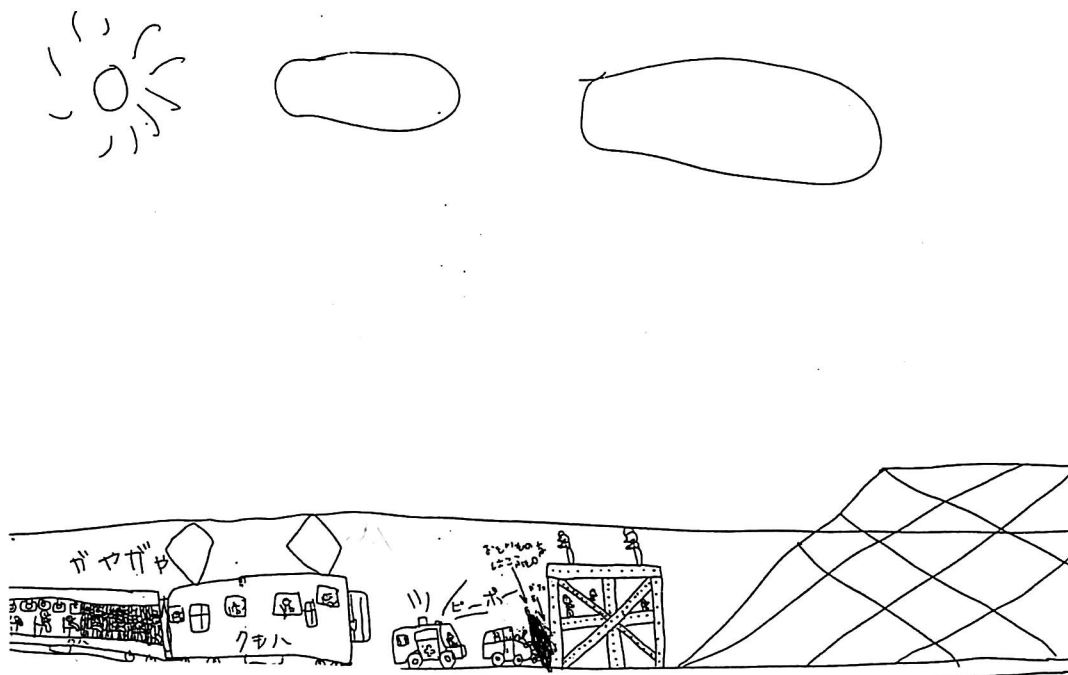
### ア 母子関係

これまで母親に重なるように同じ布団の中で寝ていたのが離れて自分の布団で寝られる、日中は庭に出て母親がそばにいらなくても一人遊びができる、時々祖母と2人で外出できるなど母親からの分離が可能になった。学校場面でも次のように母子分離が進んでいった。

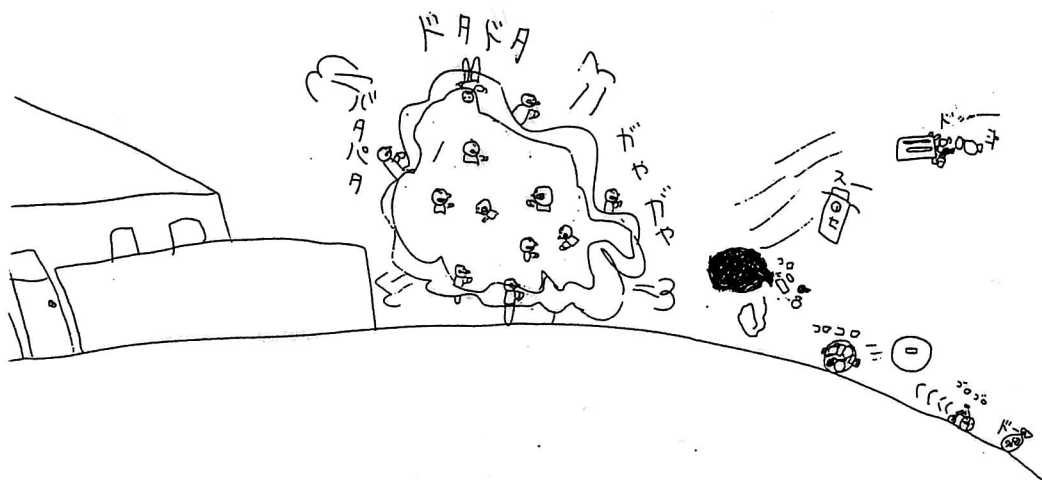
①登校意欲をみせる：双眼鏡で校舎を眺めたり、「僕学校に行っていた時、100点もらってきたよね」とつぶやく、「2年生になったら僕学校に行こうと思っていたんだ」と泣く、「学校に行く用事ないの」と母親に聞くなど登校意欲をみせ、週に1～2日は母親と一緒に保健室登校が可能となった。母親が保健室にいれば放課後教室を覗いたり、体育館で友達と遊ぶこともできるようになった。

②一人で遠足に参加：春の遠足に行く約束を友達や担任としてしまい「ママが行けないのなら僕行かない。でも、行かないとウソつきになるからどうしよう。ママ決めて」と母親に行く行かないの判断を求める。母親は「ママの仕事はお弁当作りとお見送りだけ。行っても行かなくてもママ怒らないから自分で決めなさい」と意志決定を本人に任した。本人はかなり困った様子であったが、遠足の前日、担任からの電話に「ウン行くよ」と返事した後はすこぶる明るくなった。当日の朝、母親の作ってくれた弁当の入ったリュックを背負い、震えながらも母親に手を引かれて登校。出迎え

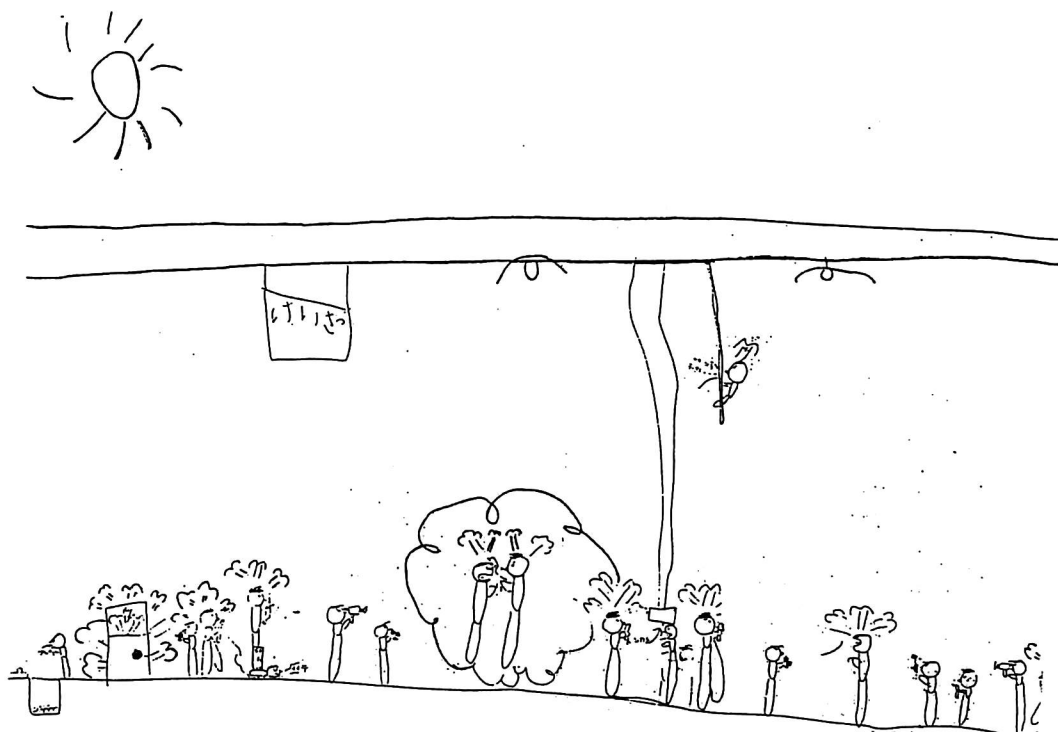
絵1. トンネルは工事中



絵2. 家の外はトラブルだらけ



絵 3. 学校の中では言い争い



絵 4. 教室から出たくない



てくれた担任と一緒に無事遠足に参加できた。

③自分の意志で運動会不参加を決める：当日は雨で運動会は中止となったが、「運動会に行く約束したけど今日は雨だから行かない」と自分の意志をはっきり母親に告げた。

④授業に参加：養護教諭と算数の授業を覗いていたのを教室の子供達がみつけ、ちょうど黒板に絵を描いてもらう場面であったことから「Yちゃんが絵がうまいよ」と友達に言われ、担任にもすすめられ上手に描くことができた。

⑤登校がスムーズに：「学校がもっと家の近くにあれば毎日でも行けるのにな」「静かな学校ならいいのに」といいながらも、自分から進んで保健室登校することが多くなった。

#### イ 同胞葛藤

アルバムを見ながら妹の誕生のころの話を聞きたがる。『ブルートレイン』という題名の絵本の中の「お兄ちゃんなんだから」という一節が気にいって、妹をかわいがる。絵本をとおして兄と妹の関係を学んだのかもしれない。

#### ウ 過去の心的外傷体験の告白

「今度赤ちゃんを産むときは家で産んでね」と妹出産時の母親喪失体験の辛さにピリオドをうつような訴えを母親にした。

#### エ 描画

①汽車をテーマにしたもの：「汽車の細かい部品」や「トンネルは工事中」（絵1.28ページ）という題名の絵。自己像である汽車の部品交換の必要なこと、未だトンネル（自己の内界）に入ったままで出口が見付からないと訴えているようだ。

②取り残された自動車：百人乗りの大きな自動車のはるか後方に壊れかけた一人乗りの自動車が走っている。「危なくないか調べている間にターボを外されてしまったのさ。それで、よく走れなくなって遅れてしまったんだ」と登校拒否の間に友達から後れを取ってしまったことを訴える。

③学校をテーマにしたもの：「学校を壊す」、「家の外はトラブルだらけ」（絵2.28ページ）「学校の中では言い争い」（絵3.28ページ）「教室から出たくない」（絵4.28ページ）などの絵を通して学校が騒がしくトラブルだらけで大変住み心地の悪いことを表現している。

#### オ 遊び

①おもちゃの機関車：プラスチックのレールに機関車を走らせる。トンネルや坂道をつけてゆっくり走らせて遊ぶ。描画同様、自己像の機関車は動きが悪いようだ。

②おもちゃの自動車：スピードメーター付きのシュミレーションを使ってドライブするが、30キロ以上のスピードを出すことができない。自己像としての機関車や自動車はまだ十分に機能していないようである。

#### カ 箱庭作品

①「学校攻撃」（絵5.）：「学校を壊すんだ」といって大勢の兵士と戦車や大砲が水車小屋の学校を包囲している場面を作り始めた。しかし、出来上がったものを見ると学校と言っていた水車小屋はY男の家のようだ。家に閉じ込められて赤い橋の向こうにある右上の学校に行けないでいるY男



絵 5. 箱庭作品「学校攻撃」



絵 6. 箱庭作品「ガソリンスタンド」





絵7. 箱庭作品「戦争1」



絵13. 箱庭作品「戦争2」





の状況を表現しているように見える。

②「ガソリン・スタンド」（絵6.）：箱庭の中央にガソリンスタンド，その回りに自動車を置く。右回りに走るもの，左回りに走るものありの無秩序状態である。また，これらの自動車の中に，故障してドアやボンネットが開いたものやガソリン切れで動けないもの，左下隅には砂に埋まったものもある。おそらく，Y男には，母親（ガソリンスタンド）からの愛情（ガソリン）補給や過去の心的外傷体験によって受けた傷（自動車の故障）の癒しが必要なようである。

## 第2期：強迫症状があらわれた時期

この時期では自我強化を図るため登校刺激を控え本人に登校するかどうかなどの判断を本人の意志に任せるよう両親に対応してもらったが，第1期のような母子分離の問題はほとんど姿を消し，代わりに強迫的な手洗いや周囲に対する過敏な反応などがあらわれた。本人の状態についての要点を以下に示す。

### ア 自己決定に伴う症状

- ①自己決定の苦しさ：登校するしないの判断を任されたためか相当に苦しんでいる様子。しかし，登校する際には，「今日は行く」とはっきり母親に伝え保健室登校する。また友達が遊びに来て一緒に遊ぼうかどうか迷ってしまうことが多かったが，「今日は遊べない」と自分の口から言えるようになった。自分に都合悪い話になると聞こえないふりをしたり，「どっちでもないことはどっちでもないの」と憤ったりするようにもなった。
- ②学習しなければならないという観念：突然教科書を広げてみたり，1年次のテストを持ち出したりするが長続きしなかった。また，「変なことさせたら学校に来てやらないよ」と仲良しになった校長に注文をつけたりする。
- ③強迫的行為：強迫的な手洗いや手に息を吹き掛ける行為が繰り返され，さらに「不潔なのって大嫌いだ」といっておもちゃなどの整理や後片付けにこだわった。
- ④周囲に対する過敏な反応：物音に対してびくつく，人の気配に対して身を隠すような仕草を見せる，首をすくめコソコソとつま先で歩くなど何かに脅えているような様子が見られた。
- ⑤規則に対するこだわり：父親の車に同乗する際など交通規則を守れとうるさく注文をつける。おもちゃのドライブゲームでもスピードを出すのを極端に怖れた。

### イ 自己の同一化モデルの誕生

一寸法師が大好きに：この時期の後半，絵本の「一寸法師」の話が気にいって毎日のように母親に読んでくれとねだることが多く見られた。

### ウ 同胞葛藤

「Mちゃんが0才だといいのに」とつぶやく。

### エ 描画

「サラリーマンの一日」：朝，家を出てバスや電車に乗り会社で日中働き，また電車とバスに揺られて帰って来るサラリーマンの紋切り型の一日を10コマのマンガにしたもの。義務としての仕

事につかなければならない味気無い未来像であろうか。

#### オ 箱庭作品

①「戦争1」（絵7.）：箱庭は2分割され、下半分の戦車や赤い兵隊が上半分の鳥居を背にした青い兵隊と戦っている。交通標識は倒れ、中央にいるトラクターとトラックは壊れて砂に埋まり動けない。超自我（青い兵隊）と内からわきあがるイド（赤い兵隊）の壮絶な戦いに巻き込まれ、自我（トラクターやトラック）は全く機能できない状態である。強迫的症状を出さずにいられないY男の心の内面が表現されている。また、赤い兵隊の後方に一人だけ青い兵士がいるが、おそらく味方をしてくれる大人の存在を示すものであろう。

②「渦巻くヘビ」：箱庭の中にゴムのヘビを投げ入れ「うっかり踏んずけると大変なことになる」と言う。超自我に抑圧されてきたイドのエネルギーの高まりを感じさせる表現かもしれない。

### 第3期：男の子らしく変容をとげた時期

第2期に見られた強迫的行為・周囲への過敏な反応・規則へのこだわりが消失し、対称的にだらしなさ・行儀の悪さ・傍若無人な態度などが強くあらわれ「悪い子」になってきた。また、母親との距離ができ、夏休みの父親と2人だけの一泊旅行を境に父親との遊びに夢中になった。対応としてはこれまで抑圧されてきたエネルギーを引き出すことを第一に考え、命令や禁止よりも父親との遊びを通して父親をモデルに自然に男の子らしさが身につくよう配慮した。この時期の終わりにはY男は教室に入れるようになったが、再登校までの経過を4段階に分け概観する。

#### (1) 悪い子の段階

##### ア 「悪い子」

①だらしなさ：上着から下着のシャツが出ていても平気で母親に注意されてしらんぷり。はなくそをはじった手でも平気でお菓子を食べたりする。また、生まれてはじめて2日間だけであったが夜尿をした。

②傍若無人：訪問客が来ると玄関に出てきて、しげしげと顔を見る。気にいらぬ人だと「帰れ」と怒鳴る。遊びに来た友達に「あっちに行けバカ」「ブス」などと悪態をつく。母親がおろおろするくらいの傍若無人ぶり。

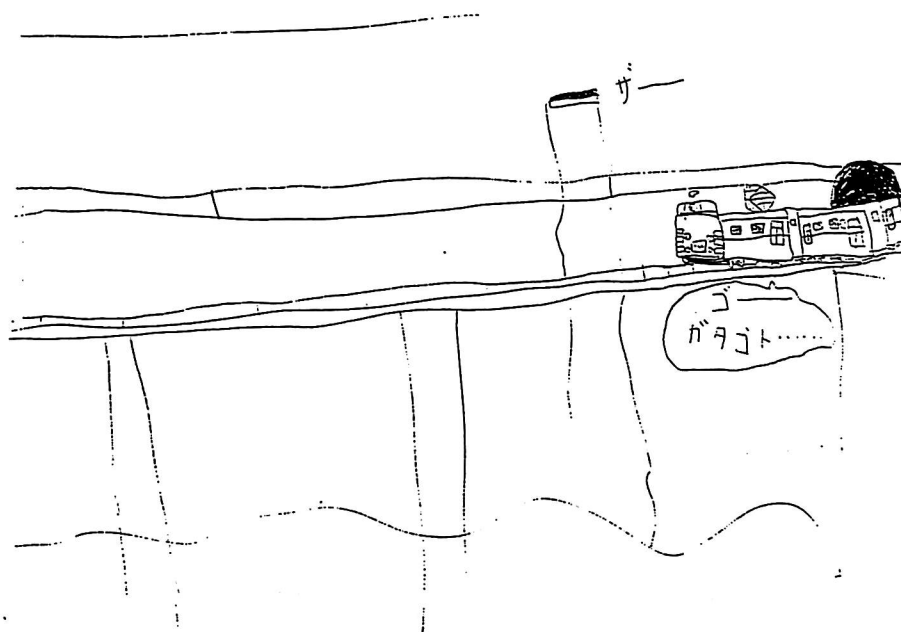
③行儀の悪さ：スリッパを脱ぎ散らかしたり蹴飛ばし揃えようとしない、テーブルの上に足を乗せ踏ん返り返って座するなどし注意してもきかない。

##### イ 父子関係の変化

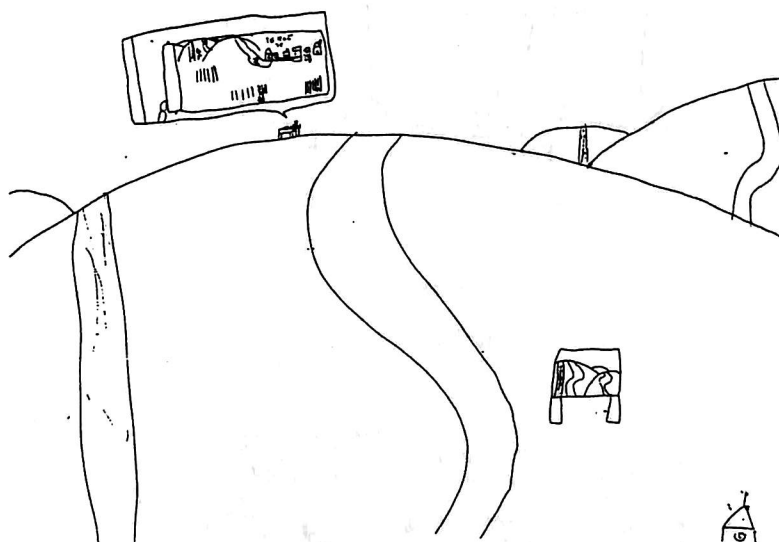
・父子同調型の遊び：夏休み、父親と一緒に真っ黒になって川遊びや畑仕事の手伝いをするを喜ぶ。そして、捕ってきためだかを水槽に入れて毎日うれしそうに眺める。これまでは、父親は強い子にしようと躍起になる傾向があったが、教えるのではなく時を共に過ごすだけで本人が喜ぶことを理解した。

##### ウ 同胞葛藤

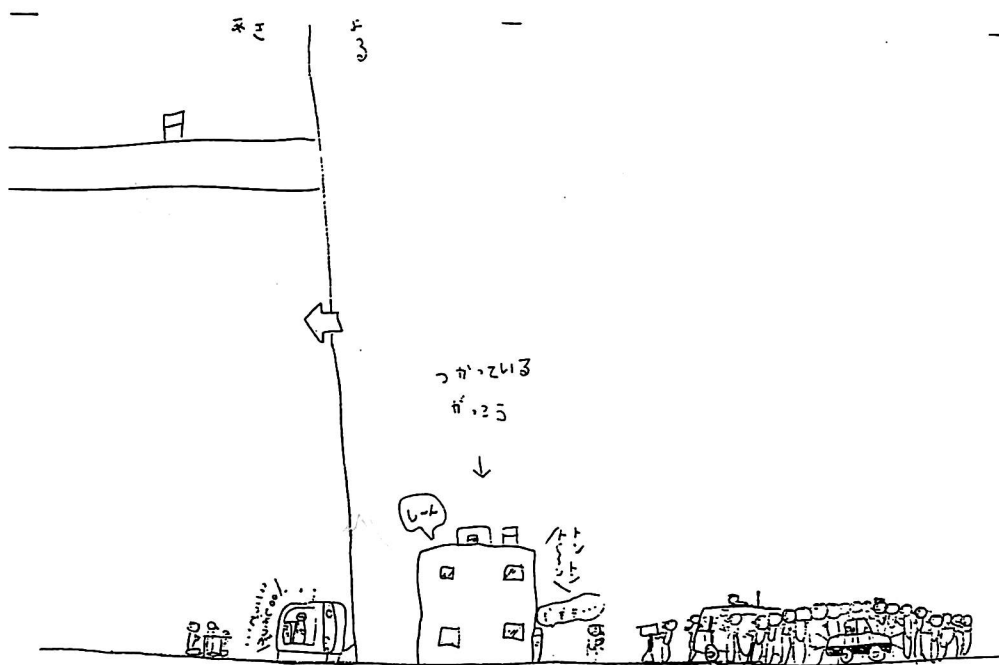
絵 8. 「電車がトンネルを抜け出た」



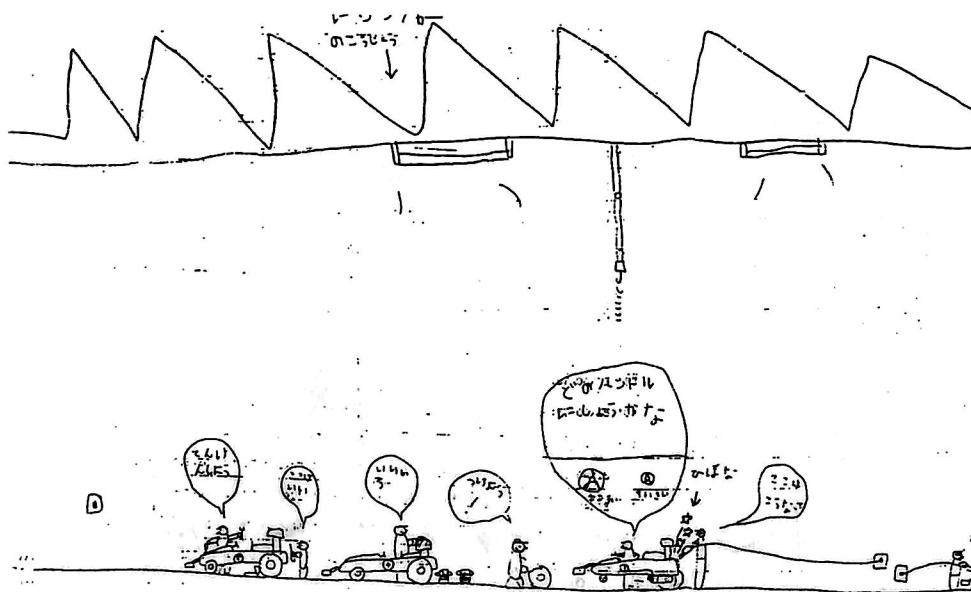
絵 9. 「10時間でつく学校」



絵10. 「怖い夜の学校」



絵11. 「レーシング・カーの工場」



・「Mちゃん、よその家に行ったら」と妹に言うが、幼い妹は意味が理解できず「明日ね」などとこたえる。妹を疎んじる反面、優しく歯を磨いてやったりもする。

#### オ 同一化モデルの発展：

ドラゴンボールという漫画が気に入って夢中になってシリーズを次々と読む。同一化モデルは一寸法師からドラゴンボールの主人公「悟空」とその息子「ごはん」に移り、強い父の子になろうとしているようである。また、どんな願いも3つだけかなえてくれるドラゴンボールの怪物「シェンロン」には次の3つのお願いをする。

- ・勉強なんかしなくても頭が良くなるようにして欲しい。
- ・病気になってもすぐに死なないようにして欲しい。年をとって死ぬのは仕方ないけどね。
- ・Mちゃん（妹）なんかいなくなればいい。

#### カ 再登校へのステップ1

「小学校と中学校は行くけど、高校と大学は行かないよ。学校なんかなくなればいいのに。学校は昼間はなんともないけど、夜になると変なものが出てくるんだ」と言いながらも教科書を広げてみたりする。また、担任や養護教諭の家庭訪問を喜び、帰りには2人の姿が見えなくなるまで見送る。

#### キ 描画

- ①「電車がトンネルを抜け出た」（絵8、33ページ）：やっとトンネルの中の工事が終わったらしく、勢いよく電車が音を立てて出てきたところ。勢い余って現実場面では悪い子になっているようだ。
- ②「10時間でつく学校」（絵9、33ページ）：山越え谷越えでまだまだ学校は遠い。
- ③「怖い夜の学校」（絵10、33ページ）：「昼間はなんともないけど夜になると何かが起こるんだ」という。学校はまだ怖いところであるらしい。

#### (2) ゲームでルールを身につけた段階

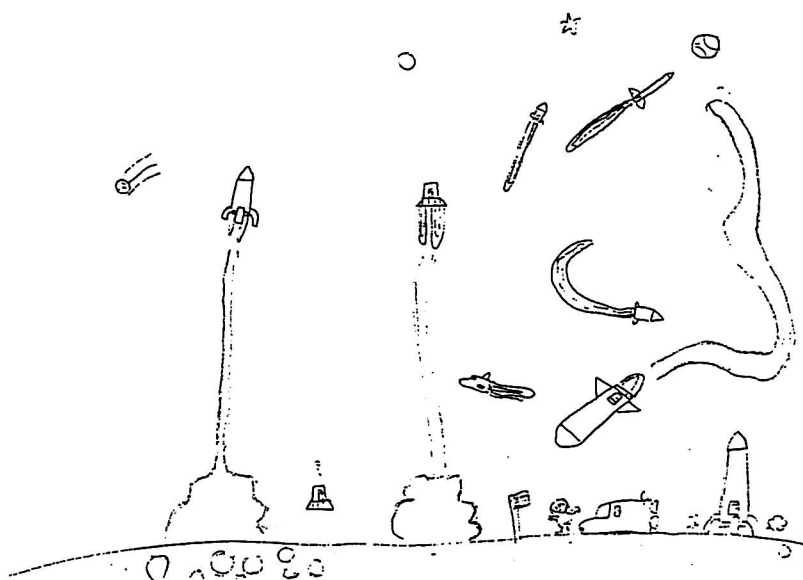
##### ア 父子関係

・間接対戦型の遊び：おもちゃのゲーム機を使って父親と対戦するあそび。「クロス・ファイアー・ゲーム」（ゲーム盤上で互いの円盤をパチンコ玉様の玉で打ち落としあうゲーム）やバスケットボール・ゲーム（1回交代でシュートし得点を競うゲーム）を好んでやった。はじめのうちは父親ばかり勝つのでふてくされて投げ出したり反則したりすることが多かったが、父親が2回に1度は負けてやることを指示し、技術の上達を図った。何度も繰り返しやっているうちに、父親が本気で取り組んでも全く互角の勝負になり、自信あふれる表情になった。

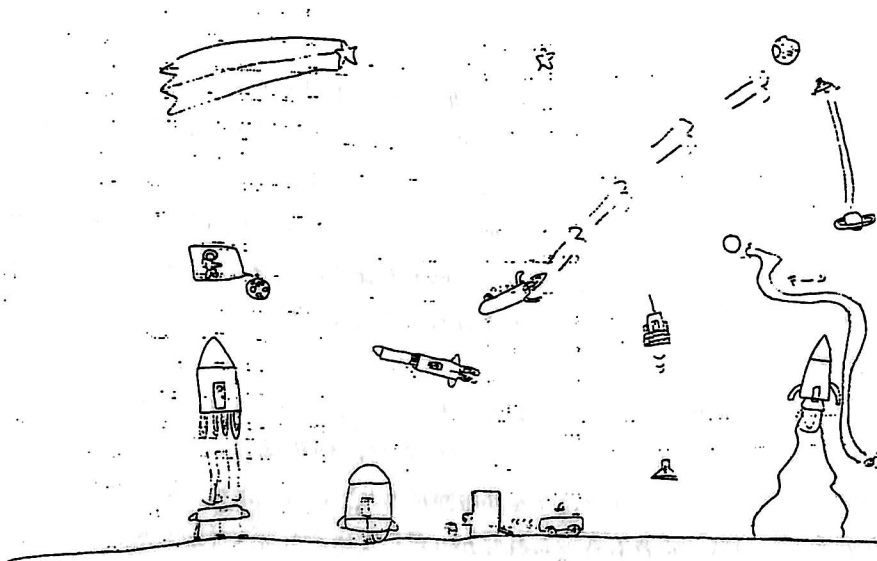
##### イ 過去の心的外傷体験の告白

・幼稚園生活の辛さ：「幼稚園に入る前の朝は、ちょっと冷たかったけど、とても気持ちの良い朝だったんだよ。あれからそんな日は一日もないんだ。幼稚園には行きたくなかった。おなかが痛くて病院に行った日でも、ママは僕を幼稚園に連れて行ったよね。そして、僕をおいてかえってしまった。そんな日は、給食も食べられなかったし友達とも遊べなかったんだ。病院へ行った日は行かせないでね。」と幼稚園入園以後の辛さを母親に訴えた。余程大変な体験であったようで、

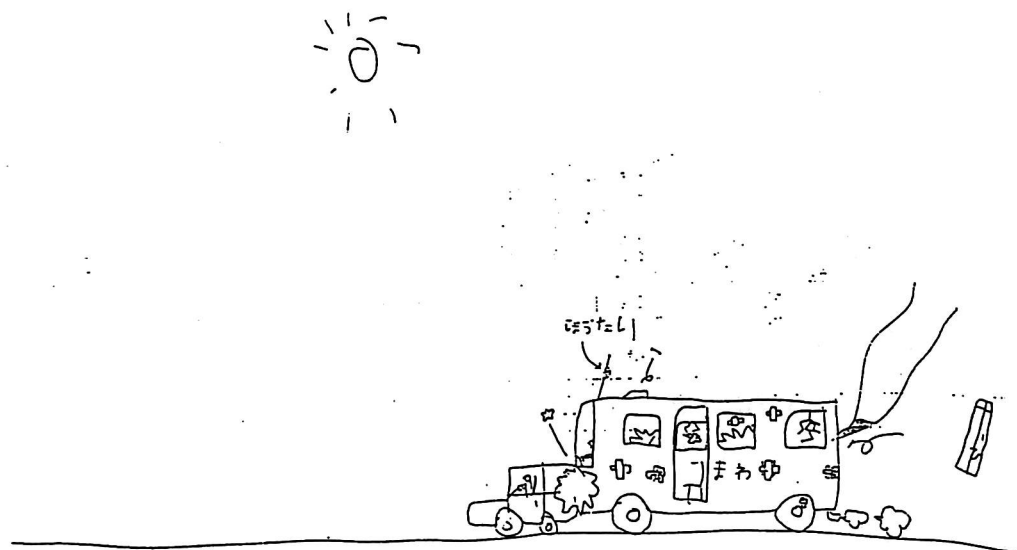
絵12. 「ロケット地球を離れる」



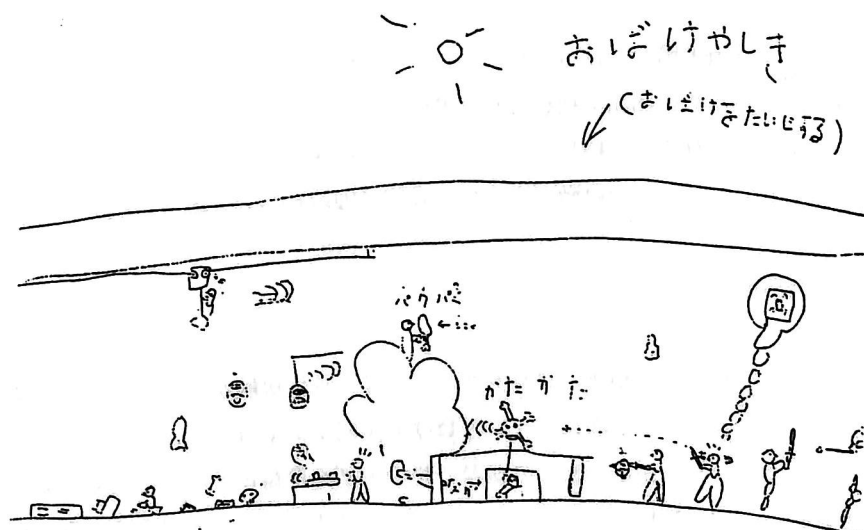
絵14. 「惑星についての宇宙飛行士」



絵15. 「通園バスの事故」



絵16. 「お化け屋敷」



この訴えをした直後から1週間ほど腹痛を訴え病院に通った。

#### エ 同胞葛藤

- ①ライバル意識の爆発：幼稚園の運動会のかけてで妹が一等賞になったのを母親が「すごいね」と誉めるといきなり怒って、貰ってきた風船を取り上げて割り、「こんなの要らないんだ」と副賞までも粉々に踏み潰してしまった。
- ②「好き嫌いゲーム」：好きだったら「嫌い」、嫌いだったら「好き」と言っていると母親に注文し、「僕のことは？」（嫌いだよ）「じゃ、Mちゃんの場合は？」（好きだよ）と母親が思わず言ってしまうと「やったー、Mちゃんのことママが嫌いだって」と大喜びする。

#### オ 再登校へのステップ2：学校に行くための条件を話す

「僕学校なんか行かないよ。でも行きたくなってしまうかもしれないんだ。僕のものまだ学校にあるかな。帽子（紅白の体操帽）なんかいらないよ。今度、体育のとき絶対ランニング（シャツ）着せてね。（1年生の体育の時先生から）上着を脱ぎなさいといわれて脱いだら僕だけ裸になって恥ずかしかったんだよ。僕体育は大嫌い。でも体育館でKちゃんと仰向けになって寝た時天井になわとびの縄やボール、いろんなものが引っ掛けててすごく面白かった」となど学校のことを自分から話すようになる。

展覧会の船の作品を仕上げた日の夜ランドセルを母親から出してもらい教科書全部を入れ背負って見せる。「僕似合うかな。ランドセルってすごく重たいんだ」と言いながら「僕を学校にやらせるには」、次の3つの条件を両親に話す。

- ・学校に隠れ家が必要なんだ
- ・ランドセルが軽いこと
- ・こんな田舎じゃいやだ。車の多い所の学校がいいね

#### カ 描画

- ①「レーシング・カーの工場」（絵11、33ページ）：工場の中でレーシング・カー（自己）がレースに参加（登校）するための部品交換が行われている。こころの中で登校準備をしているのか。
- ②「ロケット、地球を離れる」（絵12、35ページ）：地球を飛び立つロケットに宇宙飛行士が乗り込み出発しようとしている。この段階でようやく母親（地球）から分離（飛び立つ）が可能になったようにみえる。

### (3) 父の子になった段階

#### ア 父子関係

- ①直接対戦型の遊び：腕相撲、相撲、プロレスごっこなど身体接触を伴う遊びを父親に求め、「パパと遊ぶのが一番好き強いから。次にママ」と負けても向かって行く強さが出てきた。
- ②「父の子」になる：11月上旬の展覧会の課題の船の模型を母親に手伝ってもらい完成し「この船で航海に出るんだ。パパが運転、ママものってるよ」と話す。そして展覧会を「みんなで見に行こうよ」と提案した。この頃には父親の子供との遊び方が上手になったためか妹も父親になつくようになり、親子関係が良好になった。



#### イ 過去の心的外傷体験の告白

・幼稚園に対する恨み：幼稚園の展覧会に母親が誘うと「僕にナイフ持たせてね。人を殺すんだから」という。誰に恨みがあるのかと聞いても答えない。1週間後、卒園アルバムを持ち出し自分が画いた表紙の電車の線路を指さし「線路を僕は2本かいたのに、先生が勝手に1本にした」と憤慨した。おそらく、横から見た走る電車の絵であったため先生が横から見れば線路は一本と考えかきなおしたことを恨んでいたものと思われる。また、本人にとって幼稚園教育は自己の主体性を奪っていたことを象徴的に訴えたのかもしれない。

#### ウ 再登校へのステップ3：登校ごっこ

祖母に「漢字を覚えたら学校に行くんだ」と話したり、教科書を出して落書きをする。母親が「漢字を覚えるような良い子になったら、おいしいアイスクリームを買ってあげようかな」と言うとおとなげなくで怒り母親にものを投げ付ける。しかし、夜になると妹を相手に登校ごっこを始めるようになった。初めのうちは、自分や妹が交代でランドセルを背負い「学校は夜なんだよ」と言いながら「じゃ行って来るね」と廊下を歩き「ただいまー」と言って戻って来るといった形であった。そして、後になると家で待っている母親役と学校に行く子供役に分かれる設定になり「いってらっしゃい」「今頃学校でなにしてるかしら。給食残さないで食べてるかな。」「体操頑張るんだよ」などと母親の気持ちを代弁するようになっていった。

#### エ 箱庭作品

「戦争2」（絵13、30ページ）：両軍の戦いは小康状態になり、真ん中に広がった空間で性能の良い戦闘機が上空を飛んでいる（Y男が飛ばして遊んだ）。超自我とイドの葛藤状態がおさまり自由に自我が機能し自己決定できるようになっているようだ。

#### オ 描画

①「惑星についた宇宙飛行士」（絵14、35ページ）：絵の中で一足先に登校したように思える。

②「通園バスの事故」（絵15、35ページ）：母親と自分を引き裂いた憎い通園バスが事故に遭って壊れてしまった場面。幼稚園に対する恨みの感情のカタルシスが行われたようである。

③「お化け屋敷」（絵16、35ページ）：「学校の中にいたずらっ子がいて、お墓の蓋を開けるんだ。怖いけど退治しなくちゃならないんだよ」と話す。学校の中の何かは分からないが、何か怖いものに対する恐怖心を取り除きたかったのではないか。

#### (4) 自立し再登校に向かった段階

##### ア 父子関係

・冒険的な遊び：トランポリンや高いところからの飛び下りなど父親に手伝ってもらい試みる。やがて、父親の手を借りないでも自分でのびのびできるようになっていった。

##### イ 登校へのステップ4：

###### ①毎日の保健室登校

「僕学校に行けるよ」と毎朝母親に送られて保健室登校が出来るようになった。保健室では1年時いじめるといっていた友達と大騒ぎするほどの元気ぶり。これまで食べられなかった給食も校長

室で校長や友達と食べ、1日学校で過ごすことが出来るようになった。また、帰りたくなったら自分で電話をすれば必ず迎えに来る約束をし母親が本人をおいて自宅に帰ってしまっても、平気になっていった。

## ②教室へ

いやになったらいつでも保健室に戻ってもいいことを条件に担任が教室へ誘うと、すんなり教室に入ることができた。1日1～2時間の授業を受けることから始めたが徐々に教室にいられる時間が増えていった。教室では退屈そうな様子もあったが、休み時間や放課後に友達と遊ぶのが楽しらしく我慢できるようである。

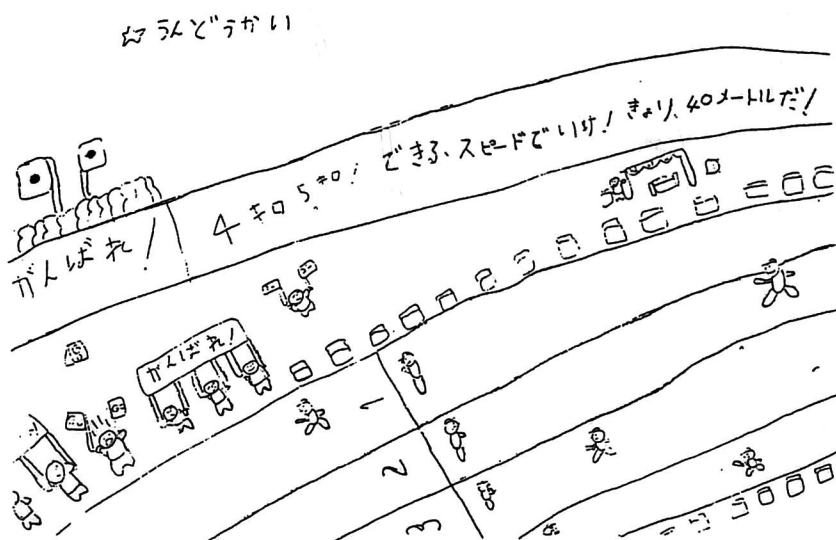
## ウ 描画

①「運動会」（絵17, 38ページ）：「できるスピードで行け」と書いてあるように、苦手なかけっこでも自分なりにやっていこうと考えているのだろうか。

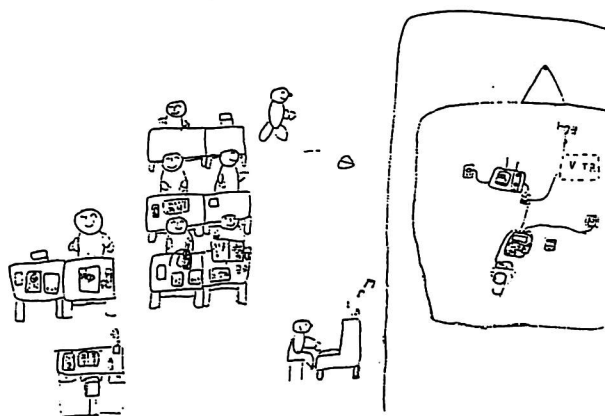
②「自習時間の教室」（絵18, 38ページ）：「僕は勉強早く終わったから、紙ヒコーキで遊んでいるんだ」と教室で過ごせるようになったことを教えてくれた。

この時期以後は本人が「毎日学校に行きたい」ということで相談関係を終結した。後日の母親から電話では、登校時は途中まで送ってやれば一人で登校できるし下校時は友達と遊びながら元気に帰って来る状態で元気に学校生活を送っており無事3年生になれそうですとのことであった。

絵17. 「運動会」



絵18. 「自習時間の教室」



#### IV 考 察

##### 1 登校拒否の原因について

本事例を振り返ってY男の登校拒否の原因について、幼稚園入園当初に体験した次の2つの母子分離体験をあげて考察する。

###### (1) 幼稚園入園に伴う母子分離体験

幼稚園や保育園への入園時には多くの子供が母親と離れられず泣いて母子分離の辛さを訴える。しかし、母親との別れの辛さに耐えながら通っているうちに園の生活にも慣れ、やがて友達との遊びや行事の楽しさを知ることによって、母子分離の辛さを忘れ元気に通園できるようになる。

本事例のY男は幼稚園入園に伴う母子分離の問題をどのように体験したのであろうか。母親は「入園のころ3週間位泣いて厭がったが、その後は元気に通いました」と受理面接の時点では受け止めていた。しかし、Y男自身は相談経過第1期の後半で母親に次のように訴えている。

「幼稚園に入る前の朝はちょっと冷たかったけどとても気持ちの良い朝だったんだよ。あれからそんな日は一日もないんだ。幼稚園に行きたくなかった。おなかが痛くて病院へ行った日でもママは僕を幼稚園に連れて行ったよね。そして、僕をおいて帰ってしまった。そんな日は給食も食べられなかったし、友達とも遊べなかったんだ」

幼稚園入園前のY男は母親の保護空間の中で同年代の子供達との競争のない、何でも思いどおりにな

る万能感に満ちた世界に住んでいたようである。しかし、Y男がはじめて触れた社会(子供空間)である幼稚園は大勢の子供達の喧噪と競争に満ち、とても自分の思いどおりにはならない世界であった。第1子として生まれ同じ年頃の子供との接触も少なく、我がまま一杯に育っていたY男にとって幼稚園は自分と母親を引き裂き同時に自己の万能感を傷つける場であった。Y男はしばしば腹痛という症状で「幼稚園には行きたくない」と訴えたが誰にも理解してもらえず2年間が経過してしまった。そして、この幼稚園入園以後は「気持ちの良い朝」が「一日もない」というように母子分離の問題は全く克服されないまま小学校まで持ち込まれていた、とY男は訴えているように思われる。

## (2) 妹の誕生に伴う母子分離体験

弟妹の出産時の母子分離は、母親に依存する度合いが大きい幼い子供にとっては辛い体験である。それは自分を世話し保護してくれる対象である母親を失うのではないかという母親喪失の不安を引き起こす。また、弟妹が誕生することによってそれまで自分に向けられていた愛情が奪われてしまうのではないかという愛情喪失の危機を体験することでもある。そのため弟妹の誕生前後に夜尿や指しゃぶりなどの退行現象、母親への甘えや擦り寄り、弟妹に対する攻撃などが見られる。特に幼い第1子の場合はそれまで愛情を独占していただけにこの傾向が強い。しかし、多くの子供は母親の存在と自分への愛情の再確認を行うことや兄弟としての自分の役割を身につけながらこの危機を乗り越えていくことができる。

本事例のY男は入園まもない6月に妹の誕生による母子分離を体験している。その当時を教育相談経過第1期の後半で鮮明に想起し次のように母親に訴えている。

「Mちゃん(妹)が生まれるとき、ママどこを探してもいなかったよね」「雪道でママに会えなくなったらどうしようかと心配だった」「今度赤ちゃんを産むときは家で産んでね」

妹の出産時急に陣痛が始まり、母親は眠っていたY男に別れを告げずに入院した。目を覚ましたY男は母親を捜し回った。しかしどこを探しても母親の姿を見付け出すことができなかった。まだ幼く母親を全面的な依存対象とし、また幼稚園入園当初の母子分離の辛さや万能感喪失の危機に見舞われていた矢先だけにY男にとって恐怖に満ちた体験であったことが伺える。そして、このことが大きなこころの傷(心的外傷)となったにちがいない。それ以来Y男は、いつ自分の前から母親が消えてしまうかと恐れ、母親を見失わないように常に気を配ることになってしまった。そして、通園、通学などの母子分離は母親喪失の不安、つまり母子分離不安を常に引き起こす引き金になってしまったといってしまうのは良いのではなかろうか。もしそうであるとすれば、妹の出産に伴うこのような母子分離体験がY男の登校拒否の原因と考えることができる。

このような2つの母子分離体験をほぼ同時期に受けたY男は、それまでのわがままな子から「聞き分けのいい良い子」に変身してしまった。そして、その後の幼稚園生活では全く表面上は問題を見せずにすごした。この「良い子」への変身は母親からの愛情を失いたくないための「お兄ちゃんらしさ」やおとなしくしていれば友達からいじめられない、先生からもかわいがってもらえるという幼稚園生活への仮の適応の姿であったのではないと思われる。しかし、Y男のこころの内面の成長はこの時点で停止してしまったといえる。そして小学校入学後、ついに友達のいじわるをきっかけに母子分離不安を伴う登校拒否状態に陥ってしまったと思われる。

## 2 立ち直り要因について

本事例Y男が登校拒否からの立ち直るために必要であった次の2点について考察する。

### (1) 母子分離不安の克服

考察1で述べたように、2つの母子分離によって常に母親喪失の危機を抱え、母子分離不安に落ちいていったY男はこれを克服しない限り登校出来ない。経過の第1期でY男は母親にすがりつき甘えながら母親との様々な遊びや行為を行っている。母子関係の修復という観点からこれらを整理し、母子分離不安の克服にとってどのような意味をもっていたのか考察してみたい。

①母子一体感を味わうもの：おんぶ、だっこ、「ぐるぐるまわし」（母親に抱かれてぐるぐるまわってもらう）など母親との身体接触をとおして、母子一体感を確かめることがなによりもまず初めにY男にとって必要であったように思われる。

②見失った母親の再発見のための「かくれんぼ」：母親が目の前から消えいなくなってしまうのではないかという不安と、消えた母親が再び自分の目の前に現れることを確認できる喜びを味わえる遊びである。その意味でY男にとっては母親喪失の不安を克服するために大変重要なものであったと思われる。

③母親の子供である自分の確認のためのもの：「逆さだっこ」（「僕は本当におなかの中にいたの」と母親に聞き子宮内の胎児のように逆さになって抱かれる）、地球や人間の誕生に対する母親への「どうして」という問い、誕生の頃のアルバムをしきりに見るなど。これらの行為は妹の出産時に母親を喪失したと同時に母親の子供である自分を喪失したことを明確に物語っている。母子分離不安を解消するためには母親の子供である自分をこのような行為で再確認する必要があったものと思われる。

④母親の正体の確認のためのもの：おねだり（おもちゃを買って欲しいと次々と要求する）を通してどこまで母親が要求に耐えられる存在なのか、その限界を知りたいと確かめたり、母親との「電車ごっこ」や「蒸気機関車ごっこ」をとおして母親の判断や考え方を知ろうとしている。おそらく目の前の母親が一体どんな存在なのかその正体を確認したかったのではないと思われる。

①～④のような一連の母子関係の確認を終え、Y男は「地球は太陽から生まれたんだ」「僕のママが一番お母さんらしい」と母親を実感できるようになった。そして、その後徐々に母子分離が進んで行ったことを考えるとこれらの遊びや行為一つ一つが母子分離不安の克服に重要な意味を持つものであったと言える。

### (2) こころの変容

Y男のこころの状態は描画やおもちゃを使った遊び、箱庭作品などの自己表現の中に見ることができる。Y男が再登校に至るまでのこころの変容過程を経過の各時期にみられるこれらの表現を通して考察してみたい。

第1期では「トンネルは工事中」（絵1）で汽車が動きが取れない、あるいは「ガソリン・スタンド」（絵6）の回りに故障した車やガソリン切れの車がいるなどといった表現を用いて、こころの傷の癒しのために母親の愛情の必要な、また何かの障害のため動き出せないでいる自己の状態を訴えている。立ち直りのためにはまずはこころの傷の修復が必要であることが伺える。

第2期では、こころの内面では第1期でこころの傷が癒えた子供らしい自分（イド）と聞き分けのい

い「良い子」の自分（超自我）との戦いが行われており、この2つの戦いが激しく自分自身（自我）はどう判断し動いて良いのか分からなくなっていることが箱庭作品の「戦争1」（絵7）に明確に表現されている。このことは、現実場面では強迫的な手洗いや周囲への過敏な反応などとして見られた。おそらく、これまで抑圧されてきた子供らしい自分（イド）のエネルギーが出口を求めてあふれ出しそうなものを「良い子」の自分が必死に止めている状態であろう。

第3期では、こころの中（トンネル）の工事が終わり「電車がトンネルを抜け出た」（絵8）。おそらく子供らしい自分（イド）が「良い子」（超自我）を打ち負かし元気一杯の生まれ出てきたのであろう。現実場面でも行儀が悪く傍若無人な振る舞いをする子供になったようである。おとなしい「良い子」から元気のいい「悪い子」へのいきなりの変身に両親もびっくりし、どう扱って良いのか戸惑った。

「悪い子」になることで引き出されたエネルギーは、現実には父親との遊びを通して、ルールに基づいたゲームの中で昇華することができた。これと平行するかたちで一寸法師や漫画「ドラゴンボール」の主人公を自己の同一化モデルにとして見付け、「強い父の子」になろうとしていた。やがて男の子らしい自己像が育って来たことが次のような箱庭作品と描画の中に表現されている。

①自己像であるレーシング・カーがレースに参加するため「レーシング・カーの工場」（絵11）に入っている。

②宇宙飛行に出発するためロケットに宇宙飛行士が乗り込もうとしている（「ロケット地球を離れる」絵12）。やがて勇敢にも「惑星についた宇宙飛行士」（絵14）となった。

③箱庭作品では「戦争2」の中に性能の良い戦闘機が1機飛んでいる。

これらの作品に自己判断力をもつ大丈夫になったY男自身のこころの状態が投影されていると思われる。そして、大嫌いだったはずの運動会も絵の中で参加できるようになり（「運動会」絵17）、教室にも入れるようになって行った（「教室」絵18）。妹との「登校ごっこ」で登校の準備を済ませ、現実にはY男は自分の意志で学校に復帰出来ていったのである。

以上のような第1～3期のこころの変容過程をエリクソンの心理・社会的発達課題になぞって考えると次のように言えるのかもしれない。

第1期は母子分離不安を克服し基本的信頼感を獲得することができた。

第2期は第1反抗期にみられる「悪い子」を経験することによって自律性の獲得ができた。

第3期は父親や漫画の主人公を同一化モデルにし、父親との遊びを通して自発性の獲得ができた。

## V 終わりに

子供達は絶えず自己表現をしながら生きている。そして自己表現を通じてこころを豊かにし、人間らしく成長していく。しかし、子供達をとりまく環境（家庭・学校・社会）がそれを阻むときこころの成長がゆがみ、阻害されてしまう。近年の登校拒否の急増は子供達の自己表現がなんらかのかたちで阻まれていることを知らしめているのではなかろうか。登校拒否からの立ち直り過程を振り返る時、自由な自己表現を保証することがいかに子供のこころにとって大切なものであるかがわかる。